■　第１回　新潟市まち・ひと・しごと創生アドバイザー会議　少子化対策部会

日時：平成 29 年７月５日（水）午前 10 時～
会場：市役所本館対策室１・２

次第４．総合戦略の進捗状況について

〇資料１～５について事務局から説明

（小池アドバイザー）

ご説明ありがとうございました。まだほかにも後で質問出るかもしれませんが、１点お聞かせいただきたいのですが、新潟市の人口の減少について、今年度の年間出生数が 5,936 人ということで減少しているということですが、日本全国で見ましても 100 万人を切るという勢いですので、減少は今の社会状況と出生年齢数の女性の数を考えると、ある程度仕方のないことなのかなと思うのですけれども、新潟市としてこの数字は、本来この計画を立てたときに、多少減少はするとしても、その減少の幅を食い止めている範囲での数字というふうに理解をされているのか、それとも、新潟市が予想していたよりも減少しているというふうに理解をされているのか、そのあたりをお聞かせいただければと思います。

（部会長）

出生数として本市として目標値をもっていないのですが、実数を見ると非常に減ってしまっているのかなというところは感じております。合計特殊出生率そのものからすると、微増ではありますが、上がってはいるのですけれども、お子さんを出産される女性の年齢、大体 20 歳から 35 歳まででほぼ 95 パーセントと私も認識しているのですけれども、やはりそこの実数が減ってきているというのが大きな要因かと思いますし、また、ここまで大きく減っているというのが､そういった年代のかたが社会的要因の部分で県外のほうに転出をされていくというのが、顕著に数字として表れていますので、そういったものも減少要素として大きく表れているのかなと思っております。小池先生もご専門でいらっしゃいますが、出生数、少子化の部分というのは、やはり実数目標をきちんと立てていかないといけないのかなと思いながら、反面難しさもあると思っておりました。

（小池アドバイザー）

数が減るのは、先ほども言ったように、今のご説明にもあったように、現状として産む女性の数が減っているという以上、例えばよほど合計特殊出生率が大幅に変わらないかぎり数は減るのです。ただ、その中で、ではその年齢の人たちが、こちらが予想していたよりはちゃんと

皆さん生んでおられるのか、いわゆる女性の数の減少数の割合と、実際減っている子どもの数の割合を見たときに、それはこの女性の数が減っていれば妥当な範囲だなという範囲の話なのか、それとも女性の数がこれぐらいしか減っていないのに、それよりも子ども数が減っているという状況なのかということをお伺いしたいところなのです。

ほかの自治体でも人数が減りました。減るのは、もう今の現状の中ではここ数年ですぐに改善する話ではないと思うのです。その中で減り幅が、できるだけ少ない範囲ですんでいるのかどうかを知りたいのですけれども。

（部会長）

お配りしたグラフの中では、27 年から 28 年に大きく減ったところが、26 から 27 については微増ではございますけれども増えたということで、少し安心感もあったと思うのですが、この 27 から 28 については、なぜ減ったのか、数字が出たばかりですので、少し分析しないとお答えできないのかなと思っております。

（小池アドバイザー）

ありがとうございます。ぜひそこ丁寧に見ていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

（高野アドバイザー）

資料３でご説明いただいたところで、幾つか実績値が下がってしまった箇所があったかと思うのですけれども、例えば有給の取得率が下がってしまったりとか、暮らしやすいまちづくりでしたでしょうか。数字が下がってしまったところに対して、とくに有給の取得率などは、専門なのでよく見ているのですけれども、新潟市は非常に一生懸命取組を進めているのに、実績として下がってしまったといったところをどのように分析をされているのか、どういった要因で下がってしまったのかといったところが、もし分かれば教えていただきたいのですけれども。

（経済部長）

正直申し上げると、正確な分析はまだされておりませんので、答えとしては不正確なものだと思いますけれども、サンプル調査ということで、全体の傾向をおおまかにとらえるというデータでございますので、社会の動き全体がどうなっているかというところまでは、ちょっと詳細には把握しておりません。

ただ、27 年度の実績が 40.5 パーセントで、次が 38.1 パーセントということなので、かなりしっかりとした要因が多分潜んでいると思いますので、その辺、先生のお力もお借りしながら今後調べてまいりたいと思っております。

（部会長）

今、社会が働き方改革ということで、大分、最近になって浸透してきているのかなと思いま

すし、一番は、やはり意識付けのところなのではないかと思います。具体的な施策を何か打っていくということも大事ですけれども、やはり有給休暇を取得するという意識をつけていくことがおそらく大事なのではないかなと。

（田中アドバイザー）

資料４の７ページ、新潟らしい教育の推進ということで少しお話しさせてください。昨年、私の子どもが通っていた中学校で地域魅力委員会というのを、生徒会が中心になってやりまして、生徒会メンバーとあとは地域のコミ協の会長であったり、地域の方と班を作ってあいさつロードを作ろうとか、夏休み以外でもラジオ体操をしようとか、いろいろ子ども達が考えたことを実現できる、できないというような、委員会を年３回くらいやったのでしょうか。非常に地域とつながりを強く持ちたいという意識が芽生えてきました。一部生徒会だけのメンバーではあるのかもしれないのですけれども、そういった意味で 42 番の新潟を知る・体験する教育の推進というのは非常に有効だと思いますので、指定校 34 校ですが、そういった活動も各学校ごとにやっていけることではないかと思っていますのでよろしくお願いしたいと思います。

あと、新潟らしいということで、地域教育コーディネーター、小島さんもいらっしゃいますが、この取組は新潟だけだということで聞いております。非常にすばらしいことだと思いますので、コーディネーターの研修もあると聞いています。コーディネーターの個々の差といいますか、能力差というものもあるような気がいたしますので、そういったものもなくしていくことも必要なのではないかと思っております。大分前置きが長くなって申し訳ありません。

44 番の、中学生から今度は高校生にもということで、新潟を意識させるということだと思うのですが、ＰＲ冊子の「ＮＩＩＧＡＴＡ　ＬＩＦＥ」とか、「ガタプラ」というのは、ペーパーのものなのですか。この辺、教えていただければと思います。

（新潟暮らし奨励課）

「ＮＩＩＧＡＴＡ　ＬＩＦＥ」というのは小冊子でございまして、新潟市にお住まいの若い大学生に協力していただいて、新潟暮らしと首都圏での暮らしを比較したデータなどを織り込みながら、新潟暮らしの良さを学生に知っていただきたいという思いで作った冊子でございます。また、「ガタプラ」につきましては、新潟市が日本初ですとか、新潟市が日本で一番とか、政令市一番みたいなものを集めたサイトです。インターネット上のサイトになっておりまして、そこで、気軽に皆さんにアクセスしていただきまして、新潟の特徴ですとか良さを知っていただきたいということで開設したものでございます。

「ガタプラ」はちょっとおもしろい名前だと思うのですけれども、ガタは新潟のガタでございまして、プラはプライドですとか、プライムとか、そういったプラというものを組み合わせてガタプラと名付けさせていただきました。これは、市民の方からもご提案いただいて、掲載

することができるサイトとなっております。

（田中アドバイザー）

これは主に中学生だったり高校生に、積極的にＰＲされているのでしょうか。

（新潟暮らし奨励課）

今後、教育委員会と協力しまして、大好きにいがた体験事業を、ガタプラのサイトにこういったことをやっていますということを掲載する予定にしております。

（小島アドバイザー）

資料３の４ページ、「35 新潟市は子育てしやすいまち」と思う保護者の割合という項目と、４ページに戻ってアの③の 24、これ同じ数字ですか。

４ページの 36 は私もかかわっていることですし、小学校、中学校でたくさんのボランティアも入り、地域の方も保護者の方とも交流を持ち、少しではあるけれどもおかあさん方が安心して子ども達を学校に通わせることができる環境を、微力ながらお手伝いできているのかなというものを持っているのですが、それに反して 35、住みやすい、子育てしやすいまちと思うかどうかというのは、昨年よりも５パーセント以上下がっているというのが私自身すごくショックで、下がったのが乳幼児を育てている親の世代で下がったのか、幼稚園、保育園、または小学校なのか、その世代の割合が今でなくでもいいので、もし次回分かるようであれば、教えていただきたいと思います。それによってどこにピンポイントでどういう対策が必要なのかというのが出てくるのではないかと思ったので、その辺気になりました。

（こども政策課）

今のご質問の、どの世代でどんな形で下がっているのかというところ、申し訳ありません、ただいま数字を持ち合わせていないのですけれども、次回、必ず皆様にお示しをさせていただきたいと思っております。私たちも一生懸命ＰＲを、ガタプラにも少し、保育園の数ですとか、新潟市もいいところがいっぱいあると思うのですけれども、なかなかまだそれを感じていただけないところが、努力不足なのかと思っておりまして、今年度、ＰＲ等も上手に広報の力も借りながらやっていきたいと考えております。ありがとうございます。

（部会長）

この保護者の、新潟市は子育てしやすいまちと思うかどうかについては、新潟市が毎年独自にアンケート調査していますので、ここの項目にどう思いますか、満足ですかどうですかという結果が、この数値なのですけれども、個々の保護者の方から、細かい自由記載のコメントもありますから、その辺も拾って、次回でもお知らせできたらと思っています。私の感覚的なところなのですけれども、やはりいろいろなご意見をいただく中では、経済的支援の部分、そこがいちばん大きいのかと思っております。例えば保育料が、市としてはだいぶ負担軽減はして

いるところですけれども、相当ご負担いただくような形。あと、子ども医療費助成の部分、一つよくいわれるのが、外から来られた方の評価、実は東京23区は中学生まで無料なのです。新潟市に来ると小学生までなのです。27年度には小学校３年生までで、その後、延ばしているのですけれども、財源が億単位なものですからなかなか。やはり経済的な負担感の部分が、よそのことを知っている方がこういうふうに出してくると思います。

（椎谷アドバイザー）

私の方から少し現状についてお話をさせていただきたいと思っております。資料２－１の３ページにあります基本目標の１番目と３番目に関してお話しさせていただきます。最初の丸のところにあります情報発信ですが、私どもの方で子育て中のお母さんたちに、欲しい情報は何かということで、３年間リサーチをしてきました。その中で一番多かったのは何かというと、子どもと一緒に楽しみたいということなのです。０歳から３歳までのお子さんの保護者の方に対してのリサーチになります。子どもと一緒に楽しみたい、具体的に言いますと子どもと一緒に行ける飲食店を知りたいとか、または他県とか他市から来た方々が、サポートが全くないので、サポートを知りたいとか、そういった情報が知りたいということがとても多いです。現在ここに書かれてあります子育て応援アプリでは、飲食店に関しては掲載されていないです。公共のアプリですので、飲食店に関してはなかなか難しいのかなとは思ってはいますが、子育てにやさしい飲食店ということで、何とかできたらいいと思っています。

15年やっている中で変わってきていると思うのは、育休明けで１年で復帰をされる方が非常に多くなっていると思っております。そうしますと、この１年間でいかに子どもと楽しく過ごせるかというのが､次に子どもを考えるポイントになっていくのではないかと思っております。ですから、子どもと楽しめる場所、また日常的に過ごす中でのヒントとか、そういったことがいろいろと発信できたらいいと思います。この中で効果的な広報に努めていきますと書かれていますので、ぜひともお母さんたちの意見といいますか、こういった情報がほしいというものを取り入れていただければうれしいと思います。

そして、三つめの丸の中のワークライフバランスに関してですけれども、今、大学で大学生のための育児学というのが１年に１回開催されています。全学部の学生を対象にして、子育てなどいろいろ学ぶわけですけれども、私も担当していまして、学生約100人に聞いた際に、子どもと仕事の両立を考えているかということで、ほとんどの方が子育てしながら仕事を続けるという意見がありました。そうしますと、やはり大学生のうちからワークライフバランスに関して学ぶ機会というのはとても必要になってくると思います。そういった、例えば大学生向けのＤＶＤを作成するというのも考えていただければうれしいのですけれども、その中で取り入れていただきたいのは、ワークライフバランスとそして子どもを生んでから、子育て支援セン

ターがあるとか、広場があるとか、新潟市はこういうことをしているので安心して子どもを生んで大丈夫ですよというメッセージを、ぜひとも企業だけではなく大学生に向けて発信していただければうれしいと思います。

子供が生まれて、２か月、３か月くらいのお母さんたちにお話を聞きますと、マタニティのときは子どもを生むまでを考えるけれども、生んでからどういう支援があるかとか、そういったことが全く分からなかったというような声もありますので、ぜひともワークライフバランス、大学生のうちから、高校生のうちからでもいいかと思いますが、学生向けということも考えていただければうれしいと思います。

（市民生活部長）

今、学生など、若い方へのワークライフバランス推進の啓発としては、男女共同参画推進センター「アルザにいがた」で実施しているアルザフォーラムの分科会の一つで、大学にお声がけして、若い方たちが集まり考えてもらう場を設けるというように、何とか啓発して広めていこうと取り組んでいるところですが、今お話をお聞きして、大学などに出かけて行って、より多くの方たちに知っていただくという取組は、とても有効だと思いましたので、考えてみたいと思います。ありがとうございます。

（こども政策課）

アプリの件、ご指摘ありがとうございます。載せられる情報については、皆さんの役に立つ情報、皆さんに使っていただける情報をということで、アプリの情報量の拡大に努めてまいります。また、大学生のうちからワークライフバランス、子育て支援についても知っておいてほしいというお話ですが、今、新潟大学と県立大学では、時間をいただきまして子育て支援策、今、どのようなものに取り組んでいるのかということをご説明する機会をいただいております。大学生の皆さんにどのように伝わっているかというのはなかなかつかみにくいところではありますが、今、椎谷アドバイザーからお話をいただきましたので、私たちも継続的にそういうチャンスをいただけたら積極的にＰＲしていきたいと思っております。ありがとうございます。

（間瀬アドバイザー）

出会いの場に関して。いろいろと仕事でそういった取組もやっている中でここ最近思っていますことは、単に飲み会の場を設定すれば良いというわけではないということは皆さん御存じのとおりです。飲み会の場で男性と女性が知り合って、連絡先を交換して、それが出会った数としてカウントされるというのは、またおかしな話ではないかと感じております。また、ＫＰＩとしての数値目標が高いとは感じてはいたのですが、着実に成果を上げていくためにはというところに関しては、啓蒙活動をいろいろとしていてもすぐには結果が出ません。そこが難しいところです。

数値目標が達成できなかったら、なぜなのか、啓蒙活動をいろいろ頑張っていました、と言っても先ほど申しましたとおりすぐに結果は出ませんので、根気強くやっていかなければなりません。結果が出なかったからといってだめなのか、どうなのか、というところもスピーディーに分析をして、次どうしようかというところを取り組んでいかないと、結論として何も達成できなかった、ということになると思います。

最初に、出会う場としてどのような場が必要なのかということをお考えいただくのはもちろんですが、幾つか私が実際に試してみて分かったことがあります。出会いの場、男性と女性いきなり会っても、話せないですね。これは去年もお伝えしましたが、男性におしゃれをしてきてくださいねとお伝えしても、ジャージでその場に来られるとあまり望ましくありません。女性の印象、第一印象は重要ですから、シャツとジャケットを着てくると、女性の印象が良くなりますということをひと言事前にお伝えして、実際にそういう格好をしてきた方は、女性と話せるのです。話すのです、本当に。ジャージで来てしまいましたよという人は、端っこに行ってしまうのです。なぜかというと周りと違うから。みんなはちゃんとシャツ着ています。Ｔシャツではなくて、ちゃんとシャツを着ていますといえば、２、３時間の場なので、身だしなみ、言葉づかい、こういったことを気をつけましょうねということを、だれにも言われないまま来てしまうと、やはり女性とは近づけないと思いますし、女性側も深層心理としては話したくないと思う可能性は高いと思います。

個人の価値観に非常に関わる事ですが、多少は基本的な身だしなみやマナーは、最終的には教育という面にも関係していると思います。書類には中高と書かれているものありますけれども、もっと若いうちからの教育にも関連していると思います。

家庭において、というところでワークライフバランスを筆頭にいろいろと取り組んでおりますけれども、お父さん全然帰ってきません、お母さんも仕事で帰ってきませんとなると、子どもの拠り所ってどうなるのかなという思いもあります。全体的には、少子化や働き方や出会い等、全部関係しているという中ですぐ結果を出さなければいけないのではなく、期間を決め、ある程度長期、たとえば５年サイクル程度で啓蒙していかなければいけないと思います。各案件がきちんと分かれて、それぞれの目標設定はしているとは思います。しかし、実態としてどうなのか、実質どうなのかというところを、そういう市民の声ときちんと向き合わないといけません。理論だけが先走ることがありますので、ぜひそういった見方、姿勢、取り組んでいただきたいと思っています。

あと、出会いの場というので、自社内ではどうなのかとなると、未婚の方も当然います。そういう方たちへ、どういう働き方をすれば良い結果を生むのか、自社内で取り組んでもいます。そして実際、公務員の皆さんはどうなのかなというところで、市役所の職員は非常にたくさん

いますから、自ら率先してそういったことでというところで、この建物の中でも未婚の方たくさんいると思いますし、自分たちはどうなのかというところも、向き合っていただきたい。行政として全体的に、市民のために、という意識はもちろん、自分たちはどうなのか、そしてどういう新潟にしていきたいのか、と真剣に考えていただきたいと思っています。街のことを考えることはシビックプライドにもつながりますし、新潟らしさを探そうとしますから、最終的にはいいことがたくさんあると思います。まずは自分たちはどうなのか。全然まとまらない意見になりまして申し訳ございませんが、よろしくお願いします。

（こども政策課）

出会いの場づくりについては、今年度、私どもの所管として、取り組んでいくこととしておりますが、今、お話いただいたように、出会いの場、飲み会の設定だけではないということです。本当に私たちも、行政は出会いの場づくりでは、まだまだ後発組というか、民間企業の皆様が先を行ってらっしゃるので、そういうところに学びながら、少しでもいい出会いを作っていけるようにと思っております。また、啓発活動は、すぐに結果出ないとおっしゃっていただいて、本当にそういうものだと思っています。すぐに何かしら結果を出さなければいけないという、そういう部分もあるのですけれども、それと一方で着実に教育も含めまして啓発活動というか、その部分もしっかりと根気よく続けていきたいと思っております。

（部会長）

ありがとうございます。出会いの関係というのはなかなか役所が取り組みづらくて、ちょっと一歩下がったような形、要は若者たちの生き方を少子化だからみたいな形で、どう誘導していくのかという部分に、ちょっと二の足を踏んでいたのが事実あります。今までどちらかというと例えば商店街であるとか、地域のスポーツ施設で、独身男女に来ていただいて、ということに取り組む場合の支援が、どちらかというと中心でした。やはりそれだけでは取り組み足りないよねということで、昨年度、実は、中央公民館が自主的にプログラムを組んでくださって、お互いにそういう結婚の価値観とか、いろいろなおしゃれみたいな部分が、たしかプログラムにあったと思うのですが、そういったところから入っていければいいかと思っています。これに関しては役所は素人なので、皆さんからのご意見が一番大事かと思いますので、今後とも、私どもの方も学んでいきたいと思っています。たいへんありがとうございます。

（菊地アドバイザー）

私は、35 番の新潟市は子育てしやすいまちと思う保護者の割合が 40 パーセントとあったのですけれども、あとの 60 パーセントの人はどういうところがしやすいまちと思わないのかと思ったので、小島アドバイザーがおっしゃってくださったとおりだと思います。

あと、33、34 で新潟の良さを伝え、新潟への愛着を生む教育の推進というのが 100 パーセン

トになっていて、これはすぐに結果が出ることではないと思うので、10 年後、20 年後どうなるかということだと思いますが、こういうことは継続していくというか、そういうことによって子ども達がもし県外に例えば出たとしても、やはり新潟はよかったというUターンにつながっていく、もしかしたらすごく気の長いことなのかもしれませんけれど、そういうことにつながっていくのではないかと思いますので、よろしくお願いします。

（教育次長）

私の方からお話をさせていただきます。学校教育は学校教育で完結するわけではなくて、将来的に地域に出たり、社会に出たりするので、新潟市としては学校は準備期間なんだよというとらえをして、学社民の融合ということで学校と地域、社会教育施設と連携をしながら学校教育を進めていきましょうということですので、菊地アドバイザーがおっしゃったとおり、これは１回何かをやったから結果が出るのではなくて、継続的に持続可能な取組をしていくというふうに私たちは考えています。大好きにいがた体験事業も、あくまでもその目的に基づいて、これは教育課程の中に位置づけて継続してやる、それからドリームプロジェクトというのがあるのですが、これは教育課程だけではなくて、教育課程外でも地域教育コーディネーターに尽力していただいて、継続できる事業に取り組んでおります。そのように、私たちはあくまでも持続可能な活動、取組というものを年頭に置きながら活動をしております。

（渡部アドバイザー）

私は、一緒に働いているメンバーが十数名いますけれども、それをまとめるに当たりまして、目標を立てるのですけれども、目標を立てて、地方創生につながるように、お客さまのためになるように、その最前線にいる支店をヘルプしていくというのが、私たち地域産業支援部という本部にあるのですけれども、それがミッションなのですが、一人ひとりのメンバーに目標を設定する場合に、この人がある一定の、少し頑張ればできるよねというところを設定するのが重要だと思うのです。高すぎるとやる気をなくしてしまうし、低すぎると適当にやってしまうということだと思うのです。その目標設定が正しいと、仕事において充実感を持って一生懸命やってくれますので、それがひいては銀行全体あるいは社会全体につながっていくのかと思っていまして、そのように指示しているのですけれども、すべての人がそのように充実できるような、自分の持っている能力を十二分に発揮できるような世の中がいいなと私は思っているのです。

そういった観点から、ご質問というか、考え方を聞いてみたいと思ったことがあるのですけれども、少子化もそうですし人手不足もそうですけれども、お客さんのところに私自身も回っていて思うのですけれども、実際に引きこもっている子どもをもった親のお宅を回ることがあるので、それがわりとけっこう多くて、その人たちはやむなき状況において、例えば就職氷河

期といって、経済状況がよくないときに就職できなかった人たちもかなり含まれていると聞いているのですけれども、一体、私今お話しした中で実際どれだけの人がいるかで、エビデンスはないのですけれども、聞くところによると、日本全体では100万人単位だというふうに聞かれているのですけれども、そういった人が社会に出てくれば、一挙に人手不足とか結婚といったものも解消できるのかなという素人考えを、実は持っているのです。では一体に社会に出て求職もせずに家に居る人たちが求職をするモチベーションをといったら、そこのあたりがよく分からないのですけれども、職業訓練とか、あるいは一方で雇用を増やすとか、そういったことが考えられると思うのですが、その辺のところというのはどうなのでしょうか。私はこう考えるのですけれども、そういったものは政策の中には考えられているのかなと思いまして、質問というか、意見というか、お聞かせ願いたいと思いました。

（経済部長）

ありがとうございます。一般的にニートといいますか、若年無業者というくくりになってくるのかもしれませんけれども、原因はともあれ、非常に難しいタイプの方たちでありまして、どういうふうに社会に出してサポートしてあげられるかというところが貴重だと思います。渡部アドバイザーおっしゃるように、潜在労働力としては、非常にボリュームの大きいところでございますので、何とかそういうサポートもしたいとは思っておりますが、今のところ新潟市、全国的にもそうなのですけれども、ジョブカフェとかサポートステーションみたいなところで、ゆっくりゆっくり社会になじませる、あとは就業のトレーニングをしていただくというところからじわじわとやっていって、年々社会に出ていかれる方も若干なりともいらっしゃるので、そういった取組も引き続き根気強くやっていく必要があるかと思っています。

（岡アドバイザー）

初めて参加させていただいて、目がぐるぐるぐるぐるしていますけれども、本当に普通に家庭で生活をして、地域と交流を持っているという目線から少し、今のニートのひきこもりの問題ですね、これは障害者とか高齢者とか、介護度だとかそういう人はみんな民生委員対象になって、出してくださいというふうにお話がありますけれども、ひきこもり・ニートは地域の民生委員の皆さんも本当に困っている問題ですけれども、それに対しては行政の方から、ちょっと調べてくださいとか、そういう意見もまだないような状態です。ただ、いろいろなチラシがあって、こういうところがあるから、もし相談のある方は行ってくださいと言いますけれども、ほとんどの家庭がシャットダウンしていらっしゃいます。助けてくださいと手を出してくだされば よろしいのですけれども、みんな、カーテンをひいてしまっているというか、そんな状態が現状です。

それから先ほど間瀬アドバイザーが、出会い系のお見合いというか、飲み会だけではだめだ、

お洋服もちょっときちんとしてこなければだめだと言ったのだけれども、テレビを見ていて、東京のほうではミシンが好きな男性とか、リフォームで、芸能人がここのお家をリフォームしましたとか、そういうことであれば、男性がそんなお洋服にとらわれなくても、もしリフォームとか、日曜大工的なことに興味のある男性と、そういうことに興味のある女性が空き家の一軒家を利用して、今日はここのリフォームで、この次来れる方はまた来てくださいみたいな感じで、一軒の空き家をきれいにしていく、そこでミシン、最近、東京の方の男性がミシンが好きで、そのカタカタが好きだとか、そういうことも取り入れて、時代も取り入れながらそういう体験のお見合いだったら、あまり服装にこだわらなくてもいいし、こういうこと好き、男の人の得意分野ってあるわけですよね。そういうお見合いのしかたもいいのではないかなと密かに思いました。

それから、子育てしやすいというのがありましたけれども、私が地域で活動している中で、たいがいの方はみんな周りから聞いて、６か月たつと子ども預けられるんだって、ああそう、あの人６か月だって、ああいいわね、きれいなお洋服着てお勤めに行ったから、だいたい一人か二人生むと、みんなあずけてお勤めに行っちゃいます。自分はそんなこと全然、そういう知識もなかったのに、お友達がみんな聞かせてくれるのですね。そうすると、ああ私も子育てしているよりもお勤めした方が、みんなきれいな形してマイカーもってお勤めに行くわと。本当に相反するものを、すごくよくしてあげればあげるほど、女性が進出しやすい、皆さんそのギャップは知っていらっしゃるのでしょうけれども、私は地元に行って、あのお母さんもう一人産んでくれればいいのにと思うのですけれども、さっさとお勤めに行って、そしておうちにおばあちゃん、おじいちゃんがいるのに、ちゃんとあずけるのです。延長保育をするのです。

その延長保育のことで私はまた一つの考えとして、施設に私は毎月行っています。そうすると、認知症のおばあちゃまでも、お人形さんを抱いて一生懸命に子守していらっしゃるのです。そして、いろいろ地域地域でお祭りがあったときに、施設に入所している方にどんなでしたかとお聞きすると、いろいろお祭りだからおいしいものも食べさせてもらったり、いろいろ盆踊りを見たりするのだけれど、子どもが来てくれた。一番喜ぶのは小さい子が訪問して、唄ったり踊ったり、おじいちゃま、おばあちゃまのそばに行ったりするのが、すごくうれしいらしいのです。

無理なことはいっぱいあると思います。衛生面とか安全面とか、いろいろあるのだけれども、高齢者施設と、あと学校が終わった後の延長保育のようなもの、そういう施設と提携しはじめるというか、やりはじめたところも、１、２聞いております。すごくいいですよと言って、午後からの学童保育ですね、それをその施設のデイサービスとか特養の場所に設けて、安全面とか衛生面も問題があると思うのですけれども、そういうふうにして、人手不足がかえって人手

がいるかいらないかは分からないけれども、そういうところから心を育てるというか、物質で、どこまでいっても幸せ、私もそうです。１千万円の着物買います、その目的のためには一生懸命やるかもしれない。でも、それを手に入れたときにそれはもう終わってしまって、もう幸福ではない。また次の幸福が欲しくなるという、そういう人間の幸福、ハピネスと幸せというそこもやはり考えながら、あまり物質ばかりに、これだけ一生懸命に物質的にもいろいろやってくださっているのだけれども、そういうところも加味しながら、アンケートとるにもよかった、うれしい、何が一番よかった、何が一番うれしい、困った、辛かった、それが一番何が辛かったですかと、子育てのときにね。

そういうことを聞いて、それを１本柱にして、先ほど子育てのときに、子どもが病気になったときが一番困りました。私もそうでした。満足に勤められなかったです、おばあちゃんが骨粗鬆症でしたから。子どもが泣いたと電話がきます。熱が出たと言って電話がきます。今日は注射の日だと電話がきます。そういうことを私もすごく大事なことだなと思いますけれども、未満児からすぐ、６か月であずけられるなんて、ちょっと私も疑問に思っていましたので、それが実現できるかどうかは分かりませんけれども、ちょっと感じましたのでご意見させていただきました。

（部会長）

地域での居場所というあたりの拠点もありますので、地域の茶の間であるとか、そういったところで地域力を生かしながら、私どもの方もかかわってまいりたいと思います。子育てしやすいまちという部分も、やはり行政だけが一生懸命やるのではなく、地域で多世代間でみていくということが大切なのかと思っています。

（小池アドバイザー）

先ほど、子どもの数のことで、ちょっと施策の方で少し伺わせてください。資料４の 30 番のところで、新潟市版のネウボラについての項目があるのですが、養育支援訪問事業が始まっているということで、ここ、具体的な数字を出してくださって、これはすごく大事なところになってくると思うのですが、実感として、これからニーズが高くなっていきそうな状況かどうかというところを教えていただきたいということと、同じように二つ目の、親子の絆づくりプログラムのことなのですけれども、参加されている方たち皆さん満足度も高く、本当に大事なプログラムだなというふうに思っているのですが、新潟市では本来のプログラムが、たしか５回シリーズで、６回目をプラスで市で独自でされていると聞いております。

それぞれの６回目の持ち方が区によっていろいろサポートの仕方が違うというのが、いろいろなところで聞いておりまして、６回目のところに例えば地域の子育て支援者の方が入ってサポートをされていたり、参加されなかった方たちに保健師さんが訪問されたりというような、

独自のことをされているところもあるのですが、一方で、6回目皆さんだけで参加してねというような形になっているところもあると聞いております。ここは質問というかお願いなのですけれども、せっかく皆さんいいプログラムの中で集まってくださっているので、ぜひ、それぞれの区の中に地域に本当に根付いた子育て支援者の方たちがおられますので、新潟市はそういう意味では、そこは非常に丁寧にされてきたところだと思いますので、そこにつなげるような仕組みというものをぜひ、区単位の中で考えていただければなと思います。

例えば33番の拠点事業とか、新潟市はたくさんあるのですが、今ヒアリングとかいろいろしていますと、お母さん達の参加のきっかけは何ですかというと、やはり友だちに誘われてというのが多いのです。主体的にというよりはだれかに誘われてという参加の人たちが多いということを考えると、なにかのきっかけがないと足を運びにくいというのも、現状の中であるのかなと思っております。この親子の絆づくりプロジェクトログラムがそういう最後の回が、地域の社会資源につながっていくということを少していねいにやっていくことが、先ほどの例えば子育てしやすい新潟市というところにもつながっていく一つのきっかけにもなるのかなと思います。せっかくたくさんの事業があるのに、これを有効に使っていただけるような施策に落としていくというのが、今、新潟市の中ですごく大事になってきているのではないかと思いますので、そのあたりもぜひお願いしたいと思います。

長くなりましたが、1 点目のところについてだけ、状況を教えていただければと、養育支援訪問事業について。

（こども政策課、こども家庭課）

養育支援訪問事業につきましては、各区によっても実際ケースの出方が違っている状況かと思われます。また、今後につきましては、これから増えていくかどうかというところも、今、現状を見極めている状況と考えておりますので、今後、その状況を見極めながら、その事業についてはていねいに実施できるように進めてまいりたいと思います。

親子の絆づくりプログラムの関係ですが、小池先生はじめとしてご存じの方もいらっしゃると思うのですが、第一子、初めてのお子さんを出産した後が一番お母さんたちの不安がつのるということで、第一子を出産した後にお子さんとお母さんで参加するというプログラムです。もともと区で始まったもので、それを全市に広げてやっているところですが、今、小池先生のお話のとおり、区によって対応が違うという部分、区でそれぞれのやり方で進めていくということも一つなのですが、ほかの区がどんなことをしているのかとか、もっとこんなふうにすればよかったんだというところ、もしかして区同士の情報交換みたいなことがあると、さらによいプログラムになるのかなと思いますので、その辺の機会が持てるようにしていきたいと思います。また、このプログラムが終わった後の、さらに子育て支援の支援者なりいろいろな支援

をつなげていくというところにつきましても、せっかくこのプログラムに参加した方がその後、さらに不安なく、安心して子育てができるようにということで、つなげていくような仕組みも考えていきたいと思っております。いいご提案をありがとうございました。

（田中アドバイザー）

初めて参加させていただきまして、少子化対策ということで、非常にいろいろな分野が当然絡む話だなと思っております。転出の方も、転出超過が 2,198 人ですか、20 歳から 24 歳が 1,000 人以上ということで、ちょうど大学が終わって関東圏に行ってそのまま関東に定着するというようなケースだと思うのですけれども、うちの甥も今行っているのですが、新潟に帰ってくるかと言うと、あり得ないと言って、もう東京の方で就職を決めたようでございます。それにはやはりそのまちの楽しさなども影響すると思います。やはり東京の方が楽しいので東京を選ぶということがあるのではないかと思います。私もたまに古町に飲みに行きますと、あまりの人の少なさに愕然としてしまいます。そういった部分、当然この部会で対策することではないのですけれども、やはり魅力のあるまちには人も集まります。そういった意味でいろいろな方の協力をもって、【まち】の部会の方かと思うのですが、そちらの方で少しまちづくりとも関連してくるのかとも思っています。

あと、けっこう私もＰＴＡ、私、東区なので、区のＰＴＡの集まりが毎年２回ほどあるのですけれども、必ず同じ人がいるわけです。また会いましたねみたいな、もう５年、６年とか、そういう方は子どもが３人います。４人いますとか、そういうのはけっこう多いのです。先ほどニートというような話も出たのですけれども、今、教育現場でも発達障害ですか、個性のある子が本当に多いです。学校現場では非常によく対応しております。やはりいろいろな個性があって、その個性によって例えば家から出られないという子どももおります。本当に目が良すぎてまぶしくて出られないとか、耳がよすぎて外に出るととてもうるさくて外に出られないとか、そういった問題もありますし、両親が働いている方多いと思うのですけれども、それで夜遅くまで両親が帰ってこないということになると、当然その間勉強もしませんし、ろくなこともしないということで、どんどん、いわゆる教育の格差といわれることなのですが、そういったこともあったりということで、やはり、すぐ結婚されて、子どもを作ってという方もいれば、そうではなく時を過ごしてしまうような方もいるのが現状かと思います。

先ほど岡さんが言われた、地域に子どもと高齢者、そのペアにしたものがあったらいいという話を、ずっと校長先生とも話をしていて、できれば中学校区に一つ、そういったものが毎日、９時くらいでもいいのですが、そういったところがあれば、地域のご高齢の方でもだれでもいいのですが、だれかいて、行き場のない子ども達もそこに行けば勉強ができたり、話ができたりということで、できればそこで料理なども一緒に作ったりとか、そういったことをするよう

な施設があるといいよねというようなことは、話をしていました。ぜひこれは要望で、やはりなかなか民間等で毎日というのは厳しいと思いますので、ぜひ、そういった部分もわりとひきこもりのご老人の方も多いと聞いていますし、そういったところをつなぐといいますか、そういったことがあれば非常にいいことなのではないかと思います。

あと、ワークライフバランスについて、さらに推進していくためには、企業側の一層の理解が不可欠ですというふうにありますが、うちなんかもガソリンスタンドをやっていまして、サービス業で、なかなか人手もおらず厳しい状況なのですが、そういった事情もあるということも少しおくみおきいただきたいと思います。

（部会長）

ありがとうございます。特に高齢者、子どもの地域での結びつきというのも参考に進めてまいりたいと思っております。